

「終戦の聖断下る」メモ

●太平洋戦争は昭和20年8月15日、「聖断」で終結した
▽破滅寸前のところで 最悪の事態を防げたが

藤田尚徳(俳諧)は「聖断」について

「昭和天皇と時の首相鈴木貫太郎の
『君臣一如』の見事な合作であった」

藤田が「一生忘れることは出来ない」

昭和20年4月5日、鈴木が組閣の大命を受けた時。「あれは夕方だったと思います。当時枢密院議長だった鈴木さんをお召しになりましたね、私一人侍立していましたが、出し抜けに『卿に組閣を命ずる』と、こう仰せになった。いつもですと、陛下は更に『組閣したら憲法を守るように、外交は気をつけて無理をしないように、経済は混乱を起こすことをしないように』という三つの条件をおっしゃるのですが、鈴木さんには何にもおっしゃらなかつたんです。ただただお前に頼む、というように拝されました。鈴木さんは謹厳な方ですから、自分は武人として育ってきたもので、政治に関与しないという明治天皇の勅諭を奉じて今日まできたと、どうかお許し願いたいって、背中を丸くして、お辞儀しながら言われたんですね。すると陛下がニッコリお笑いになって、鈴木がそう申すであろうことは、私にも分かっておったと。しかし、この危急の時に当たって、もう今の世の中に他に人はいないと。つまり、頼むという別の言葉です。是非やってくれ、というような意味のことを仰せになった。私は、あの時のことは一生わすれられませんな」

(東京12チャンネル昭和40年8月19日放送「終戦前夜」)

▽国家危急の時 なぜ 77歳の鈴木だったのか?

戦時宰相の資質として何が大切か

日本と世界の力関係について、どれだけ客観的な認識を持っているか、だった。開戦時の東条英機、次の小磯国昭と、陸軍出身の首相が日本の力を過信した中で、海軍出身の鈴木が、しつかりした認識を持っていたことは、「鈴木貫

藤田 尚徳(ふじた・ひさのり)

明治13(1880)～昭和45(1970) 東京生まれ。海軍大将。海兵29期。英國駐在、艦政本部長を経て昭和7年海軍次官。呉鎮守府長官など歴任。18年明治神宮宮司。19年8月侍従長。著に「侍従長の回想」

鈴木 貫太郎(すずき・かんたろう)

慶應3(1867)～昭和23(1948) 関宿藩の飛び地、大阪・久世村生まれ。海軍大将。海兵14期。大正13年連合艦隊長官、14年軍令部長。昭和4年1月予備役となり、侍従長。二・二六事件で襲撃され瀕死の重傷を負い辞職。天皇の信任は厚く、15年枢密院副議長、19年議長。20年4月首相。「聖断」で終戦に導く。戦後12月、枢密院議長に再任。著に「鈴木貫太郎自伝」

天皇の平和への思い

昭和20年年頭の御題「社頭寒梅」に、「風寒き霜夜の月に世をいのる ひろまへきよく 梅かおるなり」と歌われている。「風寒き霜夜」は厳しい戦況。世の平安、泰平の世を祈られたのだ。鈴木は昭和4年1月侍従長になり、二・二六事件で襲撃されて重傷を負い、11年に辞職するまで7年余りも「青年天皇」の側近として仕えたから、松平康昌(内大臣)は「陛下は鈴木ならば自分の肚の中を全部吐露して話が出来る、といったお気持ちを、平素から抱いておられた。このお気持ちちは、陛下より直接私も承っている」
「天皇の和平への願いは、鈴木にもはつきり以心伝心的に伝わっていた。」

松平 康昌(まつだいら・やすまさ)

明治26(1893)～昭和32(1957) 福井藩主

太郎自伝」の次の言葉でもよく分かる。

「戦争というものは、あくまで一時期の現象であって、長期の現象ではないということを知らねばならない。敗けるということは、滅亡するということと違うのであって、その民族の活動力さえあれば、立派な独立国として世界に貢献することもできるのであるが、玉砕してはもう国家そのものがなくなり、再分割されてしまうのだから、実も蓋もない」

▽小磯内閣の後継首相に 鈴木を推薦したのは
岡田啓介ら 重臣たち 多数派の意見だった
誰も 口には出さなかつたが
戦争収拾を期待し 木戸幸一(内大臣)の考へでも
… 少々の事には動じない剛直さも ……

二・二六事件で銃剣を構えた2、30人の兵隊に囲まれ、「まあ、静かにしなさい。こういうことをするには、何か理由があるだろうから、理由を聞かせて貰いたい」返事はなく、「時間がありませんから撃ちます」 鈴木は「それなら止むを得ません。お撃ちなさい」と、1間ばかり離れた所に直立不動の姿勢で、途端に発射され、心臓付近、頭、肩などに4発当たったが、「止め、止め」と連呼する中、夫人(たか)が「止めは、どうかやめて頂きたい」指揮官の大尉が入って来て「止めはやめろ」と命令し、鈴木に敬礼する。夫人が名前を尋ねると、「安藤輝三」と答え、兵隊を集めて引き揚げていった。

安藤は2年ほど前に、鈴木を訪ねて「君側の奸だ」と議論をふっかけ、「この人は立派な人だ」と、感服して帰って来たという。鈴木の人間に打たれていたことが、安藤を動かし、止めを思い止まらせたのでは…。

▽鈴木の孫(東京大學生)は 鈴木が組閣直後に
「俺は日本のバドリオになるよ」
左近司政三(國務相)は、鈴木の終戦構想を
組閣の当初から終戦を考えていたことは、疑いのない事実である。しかも鈴木さんは、講和条件として多くを望んでいなかった。国体を

の末裔。明大助教授を経て昭和3年教授となり、11年内大臣秘書官長。20年11月宮内省書記官長。24年式部官長

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)～昭和23(1948) 東京生まれ。陸軍大将。陸軍次官を経て昭和15年第2次近衛内閣陸相。16年10月首相に就任し陸相、内相兼務。対米英開戦に踏み切り、戦局悪化で18年新設の軍需相、19年2月には参謀総長も兼務したが、サイパン島陥落で7月総辞職。戦後ピストル自決を図り未遂。A級戦犯で刑死した

小磯 国昭(こいそ・くにあき)

明治13(1880)～昭和25(1950) 山形県生まれ。陸軍大将。軍務局長、次官、朝鮮軍司令官を歴任し、昭和13年予備役。14年平沼、米内内閣拓務相。17年朝鮮総督。19年7月首相に就任したが、戦局悪化で20年4月総辞職。A級戦犯で終身禁固刑

岡田 啓介(おかだ・けいすけ)

慶應4(1868)～昭和27(1952) 福井県生まれ。海軍大将。連合艦隊長官を経て昭和2年田中内閣海相。8年斎藤内閣海相。9年首相に就任したが11年二・二六事件で襲撃され総辞職。戦争中、重臣の中心となって東条内閣倒閣、終戦に動いた

木戸 幸一(きど・こういち)

明治22(1889)～昭和52(1977) 東京生まれ。維新の元勲木戸孝允の妹の孫。昭和5年内大臣秘書官長。文相、厚相歴任。15年内大臣に就任。開戦前、後継首相に東条を推挙したが、戦争末期、反東条となり倒閣、終戦に尽力。A級戦犯で終身禁固刑。30年出所。著に「木戸幸一日記」

安藤 輝三(あんどう・てるぞう)

明治38(1905)～昭和11(1936) 石川県生

護持し、若干適当な条件を取り付け得れば、それでよろしい。元来が無理な戦争を、大きな力に向かって仕掛けたのだ。満州、朝鮮をハキ出して、日本本土に閉じ込められ、農業国になり下がっても、それは忍ばなければならぬ。

●「聖断」のアイデアは、どこから生まれたのか

▽近衛文麿(元首相)は「聖断」を聞いて

「そうか、その手があったのか」と 言ったという

▽この方式による 戦争の終結は

和平派の間では 早くから 検討されていた

▽重光葵(県、小磯内閣外相)は 外相在任中

「必要な場合には『天皇の絶対命令』=『鶴の一声』で一気に戦争終結にもちこむことを、木戸内大臣との間で合意していた」(昭和27年「昭和の動亂」)

▽松平(内大臣・蔵書館長)も 昭和20年3月16日(小磯内閣末期)

米内光政(海相)の特命で 終戦工作をしていた

高木惣吉(少将)に「次期政権は一応A(艦)にやらせて戦争一本に進んで、或る限度に来たとき、HM(His Majesty 王)表面に出られて転換を令せられる。Aが引っこむ。事後の收拾対策にかかる、こういう方式はどうか」と 具体的な提案
(昭和44年「高木海軍少将覚え書き」)

●連合国は7月26日、「ポツダム宣言」を発表

▽陸軍省軍務局は

「總理ハ阿南、軍需・内務・食糧ハ陸軍関係者」

阿南惟幾(陸相)を首相とする 陸軍内閣を用意

鈴木が 和平の動きを見せれば いつでも倒閣

▽8月6日 広島に原爆投下されても 参謀本部は

「本土決戦、必勝の信念にいささかの変化なし」

天野正一少将(参謀本部作戦課長)も

「必勝の信念に燃えていた。海、空及び陸軍主力を統合した唯一、最初の決戦であり、国土の持つ用兵上の利点を最大限に活用して敵を撃破し、政略上の一転機にさせる確信があった」

▽9日未明 ソ連参戦に 陸軍の衝撃は大きかった

本土決戦計画「決号作戦」は「ソ連中立」が前提
陸軍は「國体護持」を 守れるかどうかに

まれ。陸軍大尉。昭和6年頃から皇道派・青年将校グループのリーダーに。二・二六事件では首謀者として部隊を指揮し鈴木侍従長を襲撃。軍法会議で死刑

バドリオ(Pietro Badoglio)

1871~1956 イタリアの軍人。大正14年から昭和15年まで参謀総長。18年7月ムッソリーニ解任後首相に就任。9月に連合国に無条件降伏、「降伏」の代名詞に

左近司 政三(さこんじ・せいぞう)

明治12(1879)~昭和44(1969)大阪生まれ。海軍中将。海軍次官を経て佐世保鎮守府長官の昭和9年、条約派追放人事で予備役。北樺太石油会社社長。16年近衛内閣商工相。20年4月鈴木内閣国務相

近衛 文麿(このえ・みまろ)

明治24(1891)~昭和20(1945)東京生まれ。貴族院副議長を経て昭和12年第1次内閣を組織。支那事変で「国民政府対手ニセス」と声明し早期解決の道を塞ぐ。15年第2次内閣で日独伊三国同盟締結、枢軸外交、南進政策を推進。16年松岡外相を更迭、日米交渉打開に努めたが、10月総辞職。戦後、戦犯に指名され自殺

重光 葵(しげみつ・まもる)

明治20(1887)~昭和32(1957)大分県生まれ。駐ソ、駐英大使を歴任し昭和18年東条内閣外相。小磯内閣に留任。A級戦犯で禁固7年。25年出所。27年衆院議員、改進党総裁となり29年鳩山派と合同し民主党副総裁。鳩山内閣副総理・外相に就任、日ソ国交回復、国連加盟を実現

米内 光政(よない・みまさ)

明治13(1880)~昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大将。昭和11年連合艦隊長官となり、12年林内閣海相。第1次近衛、平

▽近衛は ソ連参戦に 細川護貞(瀬戸内閣)に
「陸軍を抑えるには、天祐であるかも知れん」

●和平派は、宣言受諾に向け素早く行動を起こした
▽9日早朝 東郷茂徳外相邸(麻布尾)に

松本俊一(館)ら 幹部が集まり 協議した

外務省の方針

「直ちに宣言を受諾し戦争を終結するより他に手段はないこと」で合意した。受諾については「皇室の安泰の1条件一本槍で行かねばならないこと」連合国の大天皇に対する反感を考慮し、これを条件として提起すれば、条件付受諾と見做される恐れがあり、条件として出さず、「ポツダム宣言受諾は、皇室の地位にいかなる影響も及ぼさないという理解の下に」と、一方的に宣言してしまうことに、方針を決めた。

▽鈴木(館)は 広島への原爆で
「速やかに終戦を」の 天皇の意思を伝えられ
9日に 最高戦争指導会議 閣議開催を指示
▽9日午前8時頃 鈴木の私邸(丸山)に
迫水久常(内閣官房)が 駆け付け ソ連参戦を
鈴木は「来るものが来ましたね」
東郷(相)にも「この内閣で始末をつけることに
しましょう」「陛下の思召しを伺う」と参内
▽鈴木は 首相官邸に戻り「戦争はやめるよ」

迫水に 議事運営の手筈を 指示したが
「いざという時には、陛下にご決定して頂く」

天皇の立場

明治憲法は「大臣輔弼の憲法」。天皇は国務各大臣の助言、補佐を受けながら、統治権行使する立憲君主制をとっていた。

木戸(内閣)に言わせると、「閣議と最高戦争指導会議の両方の会議が一致して主戦論になつた場合、陛下はどうなさるかと言えば、これに同意せられる外はない。陛下に拒否権はなく、これが日本の憲法の建前なんです。また、平常なら、閣議で決議出来ないとなると、閣内不統一ということで政変になるんです」

沼内閣に留任。15年首相に就任したが、日独伊三国同盟に反対したため陸相辞職で7月総辞職。19年7月現役に復帰、小磯、鈴木内閣海相。終戦に尽力した

高木 勅吉(たかぎ・そうきち)

明治26(1893)～昭和54(1979)熊本県生まれ。海軍少将。海軍省調査課長を経て昭和19年3月教育局長。海相に復帰の米内の特命で9月海軍省出仕となり、終戦工作に当たる。著に「私観太平洋戦争」

阿南 唯幾(あなみ・これか)

明治20(1887)～昭和20(1945)東京生まれ。陸軍大将。中佐の時に昭和4年から4年間、鈴木が侍従長時代に侍従武官。陸軍次官、第2方面軍司令官、航空総監。20年4月鈴木内閣陸相に就任、ポツダム宣言に条件付受諾を主張。敗戦の夜自決

天野 正一(あまの・まさかず)

明治31(1898)～昭和54(1979)愛知県生まれ。陸軍少将。ドイツ駐在、欧米、独伊課長(鐵道)、第6方面軍参謀副長を歴任し、昭和20年2月参謀本部作戦課長

細川 護貞(ほのか・もりさだ)

明治45(1912)～平成17(2005)熊本藩主の末裔。護熙(元館)の父。昭和15年第2次近衛内閣で首相秘書官。戦後、25年細川家秘蔵の美術・工芸品公開のため「永青文庫」を設立。著に「情報天皇に達せず」

東郷 茂徳(とうどう・しげのり)

明治15(1882)～昭和25(1950)鹿児島県生まれ。駐独、駐ソ大使を経て昭和16年開戦時の東条内閣外相。20年4月再び鈴木内閣外相となり、終戦に尽力。A級戦犯で禁固20年の刑を受け、拘禁中病死。著に「時代的一面 大戦外交の手記」

- ▽「ポツダム宣言」受諾となると 軍部は 強硬に反対
閣議でも 閣僚の意見不一致が 予想された
政変で「決断先送り」の 時間的余裕はなく
御前会議を開いて「聖断」を仰ぐ
- ▽御前会議は 通常は 実質的な討議も議決も
済んでいて それを 天皇の権威で承認する
儀礼的なもの 天皇が発言されることもない
- ▽天皇に 初めて 発言の機会を与えることで
天皇の意見により 一気に 終戦へ

迫水の機転が役立つことに

御前会議の召集を天皇に奏請するには、首相の他に参謀総長(鶴見鶴)、軍令部総長(豊田謙)の承認と花押が必要だった。迫水は鈴木から「聖断」の決意を聞いていたから、御前会議開催の場合を考え、午前中に期日未記入の奏請状に、両総長から署名、花押を取っておいた。

前例のないことで、警戒してなかなか署名しようとしない。迫水は「御前会議開催の場合は必ず事前に連絡します。ただ急ぎの場合、それから書類を整えるのでは時間の浪費になりますし、前以てお願いするのです」と説得した。

●9日は5回の会議で17時間半、長い一日に

- ▽①最高戦争指導会議(9日10:30~14:00)
 ②第1回閣議(14:30~17:30)
 ③第2回閣議(18:30~22:00)
 ④最高戦争指導会議・御前会議(23:50~10日2:30)
 ⑤第3回閣議(10日3:00~4:00)
- ▽9日午後4時頃 「長崎へ原爆」会議は沈鬱な空気に
△鈴木は 最高戦争指導会議で 結論から切り出した
「広島の原爆でショックを受けているところへ、
今度はソ連の参戦で、四隅の情勢上到底戦争継
続は不可能というの外なく、宣言を受諾せざる
を得ないのでないか。皆の意見を聞きたい」
- ▽米内(鶴)が 無条件で鵜呑みにするか
条件をつけるか 論点を整理した
 ①国体の護持 ②武装解除を自発的に行う
 ③戦争犯罪人の処罰も自主的に行う
 ④保障占領を回避する

松本 俊一(まつもと・しゅんいち)

明治30(1897)～昭和62(1987)広島県生まれ。外務省人事、条約局長を経て昭和17年外務次官。駐仏大使を経て20年5月外務次官に再任。戦後27年駐英大使。30年衆院議員(民主党)。日ソ交渉全権委員としてロンドンで交渉に当たり31年日ソ国交回復。33年岸内閣官房副長官

迫水 久常(さこみず。ひさづね)

明治35(1902)～昭和52(1977)鹿児島県生まれ。岡田啓介の女婿。大蔵省に入り岡田首相秘書官、企画院課長を歴任。大蔵省銀行保険局長の昭和20年4月、鈴木内閣官房長官に就任、終戦に尽力した。公職追放解除後、27年自由党衆院議員。池田内閣で経企庁長官、郵政相。31年参院議員。著に「機関銃下の首相官邸」

梅津 美治郎(うめづ・よじろう)

明治15(1882)～昭和24(1949)大分県生まれ。陸軍大将。陸軍次官を経て昭和17年関東軍司令官。19年参謀総長。A級戦犯で終身禁固刑を受け、拘禁中に病死

豊田 副武(とよだ・そくむ)

明治18(1885)～昭和32(1957)大分県生まれ。海軍大将。軍務局長、第4、第2艦隊長官を経て昭和19年5月連合艦隊長官。20年5月軍令部総長。戦犯で収容されたが23年釈放。著に「最後の帝国海軍」

… 海相と軍令部の意見が対立した …

保科善四郎(鶴見鶴)は9日朝、「もはや終戦しかない」と思い、大西滝治郎(鶴見鶴)に「いったい統帥部は、作戦上、まだ成算があるのか。ないとすれば、ポツダム宣言を受諾して戦争を止めるのも致し方ない」 大西は「まだ十分、勝ち味はある」 豊田(鶴)も「和平の提議は、本土決戦をやって、敵に大

▽東郷(外相)が すかさず「國体護持は別として、それ以外の条件をつけることは、交渉に重大な妨害となるから止めた方がいい」米内は同意

梅津(駿輔) 阿南(翻)は 4条件提示を主張「現在軍部に於ては、全力を挙げて本土決戦の準備中である。究極的には勝つという確算は立て得ないが、まだ戦力を保有している。南方の島と違い本土では戦力の統合運用が可能だ。少なくも最初の上陸軍に対しては大打撃を与える可能性がある。そうすればより有利な条件下に、和平交渉を推進し得るチャンスを持ち得る。宣言を無条件で受諾するところにまで、日本の状態は至っていない」

▽豊田(駿輔)も 連合艦隊が 壊滅しているのに「海軍としても、なお一戦の力がある」

会議の最中 大西(駿輔)が 阿南を連れ出し「海軍大臣は弱腰でダメですから、

あなた方はうんと戦争継続を主張して下さい」

▽3対3で 結論を見ないまま 午後2時半から閣議

戦局判断をめぐり 阿南と米内の 激しい論戦に

▽阿南が「軍隊が無条件降伏すれば國体も何も滅却してしまう。これは歴史が証明している。戦力は一億国民が名誉をかけて戦うか否かにある」

▽米内は「対米英戦には勝ち目なし。加うるにソ連参戦せば全く勝ち目なし。一度は米英に対し打撃を与えて、数回反覆して来れば打撃は不可能だ。楽観材料はない。降伏するか、一かばちか、やるかやらぬかは、冷静に合理的に考えるべきだ。負け惜しみや行きがかりは捨てて相手方に交渉談判すべきだ」

▽東郷が「相手は談判には応じまい」

米内は「物心両面から戦争遂行能力があるかどうか、承りたい」各閣僚に 率直な発言を促した

▽豊田貞次郎(翻)は

「輸送に確信なければ、生産はダメである」

石黒忠篤(翻)「未曾有の食糧難に陥り、飢餓状態を随所に惹起するであろう」

安倍源基(内相)「民心の動向は敵懐心上がらず、戦争に自信を失っている。原爆は国民に致命的な打撃を与えた。ソ連参戦で必勝観念は失った」

打撃を与えてからでも遅くはない」大臣室に行くと、米内は事もなげに「俺は戦争は止めたよ」

大西は神風特攻隊生みの親で、徹底抗戦派。豊田も、大西の「一億総特攻」の気迫に押され強い発言をするようになった。豊田は戦後「私が恐れたのは、陸海軍の分裂だった。私が米内と同一行動をとれば陸海軍の対立になる。クーデターや内乱の心配がある。一方、和平派は、背後に大御心がハッキリして控えているから、私があれくらいの行動をとっても大丈夫だと確信した。そこで、多少回り道ではあったが、あんな行動をとったのだ」

保科 善四郎(ほしな・ぜんしろう)

明治24(1891)～平成3(1991) 宮城県生まれ。海軍中将。軍務局第1課長、兵備局長を経て昭和20年5月軍務局長。戦後30年から42年にかけ自民党衆院議員

大西 滉治郎(おおにし・たきじろう)

明治24(1891)～昭和20(1945) 兵庫県生まれ。海軍中将。昭和18年軍需省航空兵器総局総務局長。19年10月第1航空艦隊長官に就任、レイテ決戦に「神風特別攻撃隊」を編成し、特攻作戦を採用。20年5月軍令部次長。敗戦翌日に自決した

豊田 貞次郎(とよだ・ていじろう)

明治18(1885)～昭和36(1961) 和歌山県生まれ。海軍大将。佐世保鎮守府長官などを経て昭和15年海軍次官となり日独伊三国同盟を推進。第2次近衛内閣商工相、第3次内閣で外相兼拓務相。20年4月鈴木内閣軍需相兼運輸通信相に就任

石黒 忠篤(いしくろ・ただひろ)

明治17(1884)～昭和35(1960) 福島県生まれ。農林次官を経て昭和15年第2次近

●午後6時半閣議再開、「ポツダム宣言」をどう扱うか
▽東郷が「外相としての意見を述べたい」

「宣言は日本に通告して来たものではなく、ただ放送されたものだ。だから談判しようとしても出来ないから、日本としては必要なことを提示すればよい。日本民族は皇室さえ残れば滅びない。他日勃興のため、皇室以外は譲るべきだ。宣言受諾には、皇室のことは含んでいない旨を述べて、世界に表明すべきだ」

▽阿南が「4条件は絶対だ。力を失っては皇室保持は困難となる。戦いは今は互角だ、敗北に非ず」
米内は「戦争は互角でない。戦いは負けている。率直に日本の負けである」

▽東郷案に賛成=5人

米内 豊田 石黒 左近司 小日山直登(讃)
阿南案に賛成=3人

安倍 松阪広政(脚) 安井藤治(脚)

▽出席閣僚は16人 態度曖昧な閣僚もいて
閣議の行方が混沌としている時

突然 太田耕三(脚)が「内閣総辞職」を提議
「対ソ交渉の失敗、閣内意見不一致から見ても、筋道から内閣は総辞職すべきではないか」

鈴木は静かに、厳しく言い放った――

「責任はわかる。しかし今は、責任論を言っている時ではない。自分は総辞職するつもりはない。この重大事を決定せずして、去るわけにはいきません。この内閣で決着をつけます」

▽「大臣としての意見を述べよ」と迫ると
太田も「外相意見に同意です」

▽閣議の大勢は 東郷案支持になったが

鈴木は 票決の方法を探らずに 午後10時

閣議の一旦休憩を宣言 閣僚を待機させて東郷と拝謁 御前会議の開催を 要請した
この時、「聖断」をお願いしたのでは…――

松平(内閣書記官)は、「それが直接総理よりであったか、間接に内大臣よりであったかは、明らかでないが、事前に、そのようなお願いがあつたことは確かである」(昭和24年8月5日GHQ歴史課の調査)

衛内閣農相。20年鈴木内閣農商務相。農業界に大きな力を持ち、27年参院議員

安倍 源基(あべ·げんき)

明治27(1894)～平成1(1989) 山口県生まれ。昭和7年警視庁特高部長となり12年第1次近衛内閣で警視総監。14年辞職したが翌年再任。20年4月鈴木内閣内相

小日山 直登(こひやま·なと)

明治19(1886)～昭和24(1949)福島県生まれ。昭和製鋼所社長、満鉄総裁を経て昭和20年鈴木内閣運輸相(戦後東久邇内閣に副)

松阪 広政(まつさか·ひろまさ)

明治17(1884)～昭和35(1960)京都生まれ。司法省刑事局長、東京控訴院検事長を経て、昭和16年検事総長。19年小磯内閣法相に就任、鈴木内閣にも留任した

安井 藤治(やい・とうじ)

明治18(1885)～昭和45(1970)富山県生まれ。陸軍中将。動員課長、第5独立守備隊司令官。昭和20年鈴木内閣国務相

太田 耕三(おと・こうぞう)

明治22(1889)～昭和56(1981)福島県生まれ。弁護士。昭和14年平沼首相補佐官を経て内閣書記官長。翼賛会・翼政会総務となり20年4月鈴木内閣文相。戦後亞細亞大学長、自由アジア擁護連盟代表

何人かの閣僚が阿南を見ていた

「徹底抗戦」を主張していた阿南が、それが真意だったのなら、ここで、太田に同調して内閣を倒すことも出来たはずだった。しかし阿南は、まるでそうしたやりとりを聞いていなかったかのように、背筋を伸ばし、端然たる姿勢を崩していない。

そこから見えて來るのは、陸軍強硬

▽採決に持ち込めば 陸軍や右翼が

「会議は多数決によって押し切られた」と
反乱 クーデターに 発展する恐れがあった
政府の多数意思を 天皇が認めるのではなく
天皇自身の 意思の発露としてでなくては
事態収拾は難しいと 鈴木は 考えていたのだ

●9日午後11時50分、天皇臨席の最高戦争指導会議

▽宮中防空壕で 6首脳のほか 平沼騏一郎(閣議長)
陪席として 幹事の迫水 陸海軍軍務局長
池田純久陸軍中将(総合計画課)

議決後を迅速に運ぶため周到な用意

最高戦争指導会議の議決は、そのまま国家の方針として採択されるわけではなく、議決が閣議の承認を得て初めて国家意思として発動される。翌日閣議を招集している余裕はなく、閣僚を待機させた。「ポツダム宣言」受諾は、一種の条約締結に当たり、枢密院の諮詢が必要。その手続きを省くために枢密院代表として議長の平沼を出席させたのだ。

… 平沼(閣議長)が、どっちにつくか ……

米内や左近司の心配は、国体論者平沼の動向だった。米内が迫水に「多数決なら勝てる見込みはあるか? 平沼は危ないぞ」左近司は「決をとったら、決してうまく行かぬ。かえって混乱を来すから、一に聖断に待つことにしたい」米内も賛成し、「總理に耳打ちしたら、總理は、よしと言った。うまくいったよ」と左近司に。

この段階で「聖断」を知っていたのは、東郷に迫水、木戸(外相)の3人だけだった。

▽迫水(閣議長)が まず「ポツダム宣言」の訳文と

東郷(外相)の甲案 阿南(閣議長)の乙案 朗読から

▽東郷「甲案に基づき戦争を終結するより外ない」

米内は 直ちに「外務大臣の意見に同意します」

▽阿南は「全然反対であります」と 前置きして

「ソ連は不信の国、米国は非道の国、こんな敵どもに、保障もないまま皇室を委せることは、絶対に出来ない」梅津(閣議長)も 乙案を支持した

派の暴発を防ぐため体を張って行動している阿南だった。林三郎大佐(陸續官)も、「國家の絶滅を賭してまで継戦しようという考えは、毛頭持っていないかった。ただ軍人的な一面と、政治家としてやらなければならない一面との調和が、非常に難しかったのだと思う。いつかは終戦しなければならんが、無条件降伏はいやだというのにあったようだ」昭和4年から4年間侍従武官を務め、鈴木を「大提督だ」と、尊敬していたと言う。

下村宏(閣議長)「あの阿南の態度は、鈴木内閣の存続を念願する自ずからなる表われだったと思う」

左近司(陸續官)「彼は、陸軍の意見を閣議に反映させながらも、その反面、如何にして總理を助けて事態を収拾するかに、苦心していたものと信ずる」

林 三郎(はやし・さぶろう)

明治37(1904)～平成10(1998)京都生まれ。陸軍大佐。ソ連駐在武官補佐官を経て参謀本部ロシア課長、編成動員課長。昭和20年4月阿南陸相秘書官

下村 宏(しもむら・ひろし)

明治8(1875)～昭和32(1957) 和歌山県生まれ。台湾総督府総務長官で退官、大正11年朝日新聞に入り副社長。二・二六事件直後に広田内閣の閣僚候補に挙げられたが、陸軍の反対で流れ、日本放送協会会長など歴任。昭和20年4月鈴木内閣国務相・情報局総裁。「海南」のペンネームで、著に「終戦記」「終戦秘史」

平沼 騏一郎(ひらまほ・きいちろう)

慶應3(1867)～昭和27(1952) 岡山県生まれ。大正元年から10年間検事総長。大審院長。第2次山本内閣法相を歴任し昭和11年枢密院議長。14年首相に就任、独

▽平沼は 陸海軍当局に 戦争継続の確信

政府には 治安維持の見解を 延々と質して

「私は外務大臣の主旨に同意である」

国体論を展開し「事極めて重大であるから、これは御聖断によって決定すべきものと思う」

▽最後の豊田(軍令部長)は 「国体護持のみを条件とする交渉は、統帥部としては憂慮している。特攻精神も汪溢している」と 乙案を支持した

▽時計は 午前2時を過ぎ 鈴木(首相)は立ち上がった
甲案 乙案 3対3になった状況を 利用して
「聖断を仰ぐべき時が来た」と 判断したのだ

▽静かに 玉座の前に進み最敬礼した

「長時間にわたって論議を重ねたが、結論を得られない。しかし、事柄は極めて重大であり、また一刻の猶予も許されない状態にあるから、前例もなく、畏れ多い極みであるが、この際、陛下の思召しを伺い、聖慮を以て本会議の決定したい」自分の意見は言わずに 宣言するように 言い放つと会議場には 繁張した空気が…

昭和天皇は44歳、鈴木77歳

天皇は鈴木の言上に首肯いて「席に戻るよう」に言われたが、耳の遠い鈴木が耳に手を当て聞き返す仕草をすると、天皇は左手を差し延べられ、重ねて席に戻るよう示された。

迫水は手記に「若き聖天子の前にある老宰相の姿は、真に麗しき君臣一如の情景であった。鞠躬如(きゅうきゆうじょ)という言葉の意味が、判った様な気がした。それは、美しいと形容するのが一番ふさわしい光景であった」

天皇は「それなら自分の意見を言おう」

「私は外務大臣の案に同意である」—「念のため理由を言っておくが…」と、言葉を繰がれた。「陸海軍統帥部の従来計画されたものは常に錯誤し、時機を失している。本土決戦が始まろうというのに、米軍の上陸が予想される九十九里浜の防御陣地は非常に遅れ、陸軍大臣の報告によれば八月末にならなければ完成しないという。内地の増設部隊も、装備は未だ整っていないという。これでは、米軍をどうして

ソ不可侵条約締結に報に接し、「複雑怪奇」の迷句を残して退陣。15年近衛内閣内相。20年再び枢密院議長。A級戦犯で終身禁固刑。病氣で仮出所後に死去

池田 純久(いけだ・すみひさ)

明治27(1894)～昭和43(1968)大分県生まれ。陸軍中将。昭和15年奉天特務機関長。17年満州國大使館付武官。20年7月、綜合計画局長官となり9日、14日の御前会議に列席して詳細なメモを残す

甲案 客月二六日付三国共同宣言に挙げられたる条件中には天皇の国法上の地位を変更する要求を包含しやらざることの了解の下に日本政府は之を受諾す

乙案 客月二六日付三国共同宣言に付連合国において

一、日本皇室の国法上の地位変更に関する要求は右宣言の条件中に包含せざるものとす

二、在外日本軍隊は速かに自主的撤退をなしたる上復員す

三、戦争犯罪人は国内において処理すべし

四、保障占領はなさざるものとすとの了解に同意するにおいては日本政府は戦争の終結に同意す

平沼の国体論

平沼は、「天皇の国法上の地位」の字句について「適当でない。大義名分より見て宜しくない。天皇統治の大権は神代の昔から定まっているのであって、国法によって定めたものではない。憲法は、ただそのことを表現したに過ぎない」と、この箇所を「天皇の国家統治の大権に改めるべきだ」

撃退出来るか。空襲は毎日激化している。これ以上、国民を塗炭の苦しみに陥れることや、文化を破壊し、世界人類の不幸を招くことは、私の欲しないところである。この際、忍び難きを忍ぶべきである。忠良なる軍隊を武装解除したり、また昨日まで、私に忠勤を捧げてくれた者を戦争犯人とすることは、情において忍び得ないところである。しかし、これも国家のためには已むを得ない。今日は、明治大帝の三国干渉の心を心とすべきであると思う。この理由で私は外務大臣の案に同意する」

- ▽白手袋で 涙を拭いながら 途切れ途切れに 話される天皇 みんな 泣いたという
- ▽天皇は 戰局 戰力を 冷静 的確に見ていられた 鈴木が 平沼の 字句修正要求に 応じて
甲案を採択したのが 10日午前2時半
深夜の閣議を再招集し 閣議の承認を得て
日本政府の 正式な方針となつたのは 午前4時

- 10日も、朝から忙しい一日となつた
- ▽「ポツダム宣言」受諾通告は 米中にスイス 英ソにはスウェーデンを通じ 伝達することに
10日午前7時 駐在公使に 打電された
- ▽通告文の末尾には 東郷原案には
なかった言葉が付け加えられた 松本(外務省)は
「これが拙かった。皇室の地位に影響ないもの
と考える、と一方的に言い放てしまえば良
かったんだ。どうしてそうなったかは知らないが、
申し入れに先方の態度表明を要請した
ため、条件付ともとられることになった」
- ▽阿南(齋)は 午前9時半 陸軍省地下防空壕に
各課高級課員以上を集め 声涙共に下る表情で
「予の微力、遂にかかる結果に帰結に至らしめた
事は、諸君に対して誠に申し訳なく思う。深く
責任を痛感する。この上は、ただ大御心のまま
に進む外はない。是非納得してほしい」
- ▽「承諾必謹」を 陸軍の方針として 4点を注意し
「もし不服で、これを阻止したい者は、
自分を斬ってからやれ」と 結んだ

…「三国干渉の心」…

日清戦争に勝利した日本は、明治28年4月17日「台湾・遼東半島・澎湖諸島割譲」の下関講和条約に調印した。しかし23日、露・独・仏三国は、日本の遼東半島領有は極東の平和を妨げるとして、清国に返還を要求してきた。武力を背景とするもので、5月5日、勧告を受け入れたが、それからは「臥薪嘗胆」が国民決意の合言葉になった。

河辺虎四郎(かべ・とらしろう)は日誌に

天皇叱責を日誌に「即チ陛下ハ今ヤ
軍ノ作戦ニ御期待遊バサレズ(過去
ノ戦績ハ悉ク軍部ノ上奏ヲ基トスル
大御心ヲ裏切レリ、而シテ現下ノ作
戦準備ハ甚ダ未完ノ状態ニアリトノ
意味ヲ、陛下御親ラ申サレタル由)」

河辺 虎四郎(かべ・とらしろう)

明治23(1890)～昭和35(1960)富山県生
まれ。陸軍中将。駐ソ、駐独武官。航空本
部次長を経て昭和20年4月参謀次長。敗
戦後、降伏受理打ち合せにマニラ派遣

日本政府の「受諾」通告文

…帝国政府ハ天皇陛下ノ一般的平
和克服ニ対スル御祈念ニ基キ戦争ノ
惨禍ヲ出来得ル限り速ニ終止セシメ
ンコトヲ欲シ左ノ通り決定セリ

帝国政府ハ一九四五年七月二十六
日「ポツダム」ニ於テ米、英、華三国政
府首脳者ニ依リ発表セラレ爾後「ソ」
連政府ノ参加ヲ見タル共同宣言ニ挙
ゲラレタル条件中ニハ天皇ノ国家統
治ノ大権ヲ変更スルノ要求ヲ包含シ
居ラザルコトノ了解ノ下ニ右宣言ヲ
受諾ス 帝国政府ハ右ノ了解ニ誤ナ
ク貴国政府ガソノ旨明確ナル意思ヲ
速カニ表明セラレンコトヲ切望ス

▽午後1時からは 首相経験者7人を集め 重臣会議
強硬に反対したのが 東条英機と小磯国昭
小磯が「本日の集まりは会議というものではなく、決定通告のように受け取れる。いったい、誰の考えによるものか」忿懣をぶちまけると 東郷(外相)は「大命に基づくものであります」
▽渋々同意したが 東条は 不満だったようで
この後 宮中に召され 天皇に意見を述べた時
「武装解除が國体護持を不可能にする」
▽陸軍若手将校の間では 秘かに クーデター計画

●8月11日の朝刊を見て、「終戦は近いのじゃないか」

▽朝日新聞1面トップに 下村情報局総裁談話
見出しが「一億、困苦を克服 國体を護持せん
下村情報局総裁談・戦局は最悪の状態」
同じ紙面に やはり 4段見出しで 陸相布告
「死中活あるを信ず 陸相、全軍將兵に訓示」
「断乎神州護持の聖戦を戦い抜かんのみ」
▽並んで掲載されたから ほとんどの国民は
「國体護持のため、最後まで戦え」と
▽しかし 読む人は ちゃんと 読んでいた
徳川夢声(諺家)は 日記に「無条件降伏の
申し入れは略確実なりとうなづかれる」
高見順(僕)も 毎日 読売の見出しを 貼り付け
「ここに何かの含みがある如く感じられる。
「國体護持」この一線を唯一の条件として、
やはり休戦を申し込んだのではないか」
さらに 陸相布告全文を引用し ソ連参戦に
「事茲に到る、又何をか言わん」とあるのを
「それにしては、陸相の布告は何事か。「何をか言
わん」とは、全く何をか言わんやだ。国民の方で
いいたい言葉であって、指導側でいうべき言葉
ではないだろう。自らの無能無策を棚に挙げて
「何をか言わん」とは。嗚呼かかる軍部がこの國
を破滅に陥れたのである」

▽富塚清(歎工学諺家)は 皇太子の記事に注目
「『ははーん、これには何かの含みが
あるなあ』と、われわれにも感じられる」
…… 富塚の「ある科学者の戦中日記」
学生が「今日から、ちょっと空襲も変ですよ。」

細川護貞は日記に書いている

…東条は自分には意見もあるが、聖
断ありたる以上、止むを得ずのこと
を述べたりと。而して我陸軍をサ
エの殻にたとへ、殻を失ひたるサ
エは、遂にその中味も死に到ること
を述べて、武装解除が結局我國體の
護持を、不可能ならしむる由を述ぶ。
嗚呼然れども殻は既に大破せられ居
らずや!!」

徳川 夢声(とくゆう・ゆせい)

明治27(1894)～昭和46(1971)福島県生
まれ。映画弁士・漫談家。本名福原駿雄。
昭和14年からラジオで「宮本武蔵」(吉岡
潤)を朗読、話芸は天下一品と評された。
戦後も週刊朝日「問答有用」など文筆や
放送で活躍した。著に「夢声戦争日記」

高見 順(たかみ・じゅん)

明治40(1907)～昭和40(1965)福井県生
まれ。作家・詩人。本名高間芳雄。昭和10
年小説「故旧忘れ得べき」で注目を浴び
た。戦争中陸軍報道班員としてビルマ、
中国を転戦。39年詩集「死の淵より」(翻
文館)。戦中からの日記を残し、日本近代
文学館創設に尽力。死後、文化功労者に

11日付新聞各紙に皇太子の記事

日光に疎開中の皇太子(駿皇)の写真
が、「宮内省御貸下」の形で掲載され、
「天稟の御資質ますますかがやかに
あらせられる。御健康もいよいよ勝
れさせ給い、ことのほか御立派に御
成長の由である」(朝日新聞) また10日付
で從来皇后宮職に属していた皇太子
関係の事務を分離して新たに東宮職
を設け、東宮大夫に民法学者・穂積重
遠を任命した。昭和天皇退位、皇太子
即位の緊急事態を想定したこと。

もう重臣会議なんかがさかんに行なわれ、アメリカと交渉しているんじゃないですかね。結末は、二、三日くらいではないかと思いますがね」と言っている話。また帰宅してお嬢さんに、「おいおい喜べ。戦争はもうじきすむぞ。原子爆弾が救いの神だ。これで世界最終戦だ。これを持っている国には刃向かえなくなったんだ」こう言うと、お嬢さんが「それ本当？ うれしいなあ」と、手を叩いて喜んだことが。

矛盾した記事が同じ紙面に載ったのは

10日夕刻、下村(備前守)は阿南(陸相)、米内(海相)と総裁談話の原稿を練っていた。「ポツダム宣言」の受諾決定を受けて、終戦へ向け心理的ムードを徐々に作って必要がある、となつたが、原稿を新聞社に渡してホッとしているところへ、情報局から「至急帰ってくれ」陸軍が新聞社に、陸相布告の掲載を強硬に要求している。総裁談話と全く相反する内容なので新聞社も困って、「陸相と交渉して差し止めてほしい」

陸相布告は、軍内の動搖を抑える目的で稻葉正夫中佐(軍轍)が起案し、各部隊だけに下達される予定だった。ところが、総裁談話の出るのを知った畠中健二少佐(軍轍)が、これを潰そうと独断で新聞社に掲載要求したものだった。

吉積正雄中将(駿鶴)は、迫水から取り消し要求を受け、「畠中だろう」と呼ぶと、果たしてそうで、「俺の自動車を使って新聞社を回り取り消して来い」連日の空襲で新聞の締切時間は午後6時頃。翌日の新聞の紙型も出来ていて畠中から「新聞社では今頃取り消されては困る」

下村が阿南に電話し、阿南の全く知らない話と分かったが、急に「ああ、あれのことですか、ああ、あれはですね、とにかく載せて下さい」

下村が迫水と相談した結果、阿南が若手将校の突き上げで苦しい立場にいることを知っていた。阿南を窮地に陥れると、あるいは不測の事態が起こるかも知れない。阿南は今、内閣に大事な存在ということで、放っておくことに。

穂積 重遠(ほづみ・しげとお)

明治16(1883)～昭和26(1951)東京生まれ。民法学者。明治43年東大助教授となり大正1年独、仏、英に留学。9年教授。昭和20年8月東宮大夫。24年最高裁判事

富塚 清(とみづか・きよし)

明治26(1893)～昭和63(1988)千葉県生まれ。東大工学部教授。戦後、明大、法大教授。著に「ある科学者の戦中日記」

稻葉 正夫(いなば・まさお)

明治41(1908)～昭和48(1975)新潟県生まれ。陸軍中佐。昭和15年関東軍参謀。陸軍省軍事課予算班長を経て、20年4月同課編成班長。32年防衛庁戦史編纂官

吉積 正雄(よしづみ・まさお)

明治26(1893)～昭和60(1985)広島県生まれ。陸軍中将。昭和15年内閣情報局第2部長。17年陸軍省整備局長。20年3月軍務局長。戦後、東部復員監を務めた

… 11日朝、若手将校5人が集まつた …

竹下正彦中佐(輔の輔)、稻葉、畠中ら皇國史観の熱烈な指導者・平泉澄(歎誠)の門下生。前日も竹下らが大臣室に押し掛け、竹下が「ポツダム宣言を受諾するようならば、大臣、腹をお切りなさい」と迫ったばかり。阿南は林(緒館)に「竹下はひどいことを言う」林は「この一言がこたえたようで、阿南自決の一因になったのでは…」

5人の協議では、「直諫の精神がなくて、承認必謹だけなら、君主に対する盲従になつてしまふ。お諫めすることが本当の忠節ではないのか」和平派を斥け、天皇の心を翻させるため、「クーデターを決行すべし」が結論となり、具体的計画が進められていく。

- 宣言受諾を、一刻も早く連合国に知らせようと
 - ▽松本(外務次官)は 長谷川才次(同盟通信海外局長)と相談
軍検閲のない 同盟のモールス信号による
短波放送を使って 10日夜8時過ぎから
「Japan accepts Potsdam Proclamation」
 - ▽A P通信が 10日午前5時過ぎ(ワシントン時間)受信
「日本、宣言を受諾」のニュースは
2時間後に米国内 数時間後には 全世界を
 - ▽トルーマン(大統領)は 午前9時 緊急会議を招集
スティムソン(副大統領)は「日本軍を降伏させ、
硫黄島や沖縄戦のような流血を繰り返さない
ためには、日本からの要求がなくても、アメリカ
が天皇制に手をつけないことを提案すべきだ」
リーヒ(大統領付幕僚長)は「戦争が長引くことを
考えれば、天皇制は小さな問題だ」
フォレスター(海軍長官)も 同じ意見
 - ▽しかし バーンズ(副大統領)は 強硬に反対した
「日本の受諾は無条件ではない。ポツダムで三国
首脳は無条件降伏を主張した。その時は原爆も
なければ、ソ連参戦もなかった。それなのに、な
ぜ今我々はその合意を翻して、より大きな妥協
を日本にしなければならないのか」
そして「日本の条件を呑むことは、
大統領を十字架に磔にすることになる」
 - ▽ギャラップの世論調査(6月29日戦闘)では
「天皇を処刑せよ」 33%
「天皇を裁判にかけるか外国へ追放せよ」 37%
 - ▽スティムソンは ソ連の懸念を 指摘した
「ソ連が領土にしようとして侵攻して来る前に、
日本本土を我々の手に入れておくことが必要」
 - ▽フォレスターが 妥協案「降伏の条件を定義する
形で、日本の条件を受け入れる準備があること
を示す回答案を作ったらどうか」
- バーンズが、回答案を作成することに
 - ▽日本の提案に対しては 明確に答える形をとらず
天皇制は 否定しないものの はっきり保障せず
「ポツダム宣言」に 変更はないことを
改めて 主張したものになった
 - ▽回答案は 10日午後 ロンドン 重慶 モスクワに

竹下 正彦(たけした・まさひこ)
明治41(1908)～平成1(1989) 熊本県生
まれ。陸軍中佐。阿南(齋藤)の義弟で昭和
19年陸軍省軍務課内政班長。戦後、陸上
自衛隊に入り陸将、幹部学校長

平泉 還(ひらいずみ・きよし)
明治28(1895)～昭和59(1984) 福井県生
まれ。大正12年東大講師、日本中世史担当。
昭和5年欧州留学。国粹主義に傾き、
皇国史観の主導者に。10年教授。陸士や
陸大で講義、青年将校に多大な影響

長谷川 才次(はせがわ・さいじ)
明治36(1903)～昭和53(1978) 青森県生
まれ。同盟通信に入り報道局長、海外局
長。戦後時事通信社を創立、代表取締役

トルーマン(Harry S. Truman)
1884～1972 米国第33代大統領。民主党
出身。昭和20年4月ルーズベルトの急死
で副大統領から昇格。23年再選された

スティムソン(Henry L. Stimson)
1867～1950 昭和4年国務長官。戦争中、
陸軍長官。原爆製造の責任者を務めた

「バーンズ回答」
「ポツダム」宣言ノ条項ハ之ヲ受諾
スルモ右宣言ハ天皇ノ国家統治ノ大
權ヲ変更スルノ要求ヲ包含シ居ラザ
ルコトノ了解ヲ併セ述ベタル日本國
政府ノ通報ニ關シ吾等ノ立場ハ左ノ
通ナリ

降伏ノ時ヨリ天皇及日本國政府ノ
国家統治ノ権限ハ降伏条項実施ノ為
ソノ必要ト認ムル措置ヲ執ル連合軍
最高司令官ノ制限ノ下ニ置カルルモノ
トス
天皇ハ日本國政府及日本帝国大本
營ニ對シ「ポツダム」宣言ノ諸条項ヲ

△モロトフ(リサホ)は ハリマン(糸樹)を呼び出し
「連合国最高司令官を複数制にして、
ソ連を加えるならば、この回答文に同意する」
ハリマンは トルーマンの指示で 拒否した
「アメリカは太平洋戦争の負担を、単独で4年
間担つて来た。ソ連はたった2日間しか戦つ
ていない。最高司令官は一人、それもアメリ
カ人以外には考えられない」

連合軍最高司令官に マッカーサー元帥

△「バーンズ回答」は 三国の承認を得て
11日午前 スウェーデン政府を通じて 日本へ

●12日午前零時45分、サンフランシスコ放送で傍受

△松本(外敵官)が 午前2時頃 迫水(翻訳)の電話で
首相官邸に駆け付けると「この回答内容では、
日本は受諾出来ないことになるだろう」

—— 日本側で問題になった点 ——

第1項の「天皇及日本国政府ノ国家ノ権限ハ
…連合軍最高司令官ニsubject to」。そのまま
訳せば、「従属」または「服属」となる。もう一つ
は第4項「the ultimate form of the Governe
ment of Japan」「日本国政府ノ確定的形態ハ「ポ
ツダム」宣言ニ遵ヒ日本国国民ノ自由ニ表明
セル意思ニ依リ決定セラルベキモノトス」

△松本も 瞬間的には「困ったな」と思ったが
「敵も天皇の存続は一応認めて、この回答を送つ
たもので、日本の通告を黙認したともとれる」
そう解釈して 迫水を励ました

「この上交渉を重ねることは、決裂に導くだけで
何にもならない。これを鵜呑みする以外手はない。
この際は何としても戦争を終わらせねばならぬ。
私は外相を説くから君は總理を説いてくれ」役割分担を決め 松本は 東郷外相邸に
外務省幹部の協議で、こう訳すことに

「subject to」は国体論者の猛反対を予想し、
「制限ノ下ニ置カルモノトス」また「確定的
形態」は「最終的ノ日本国政府ノ形態」とし、こ
れは「政体のみに言及し、国体には触れない」

実施スル為必要ナル降伏条項署名ノ
権限ヲ与ヘ且之ヲ保障スルコトヲ要
請セラレ又天皇ハ一切ノ日本国陸海
空軍官憲及何レノ地域ニ在ルヲ問ハ
ズ右官憲ノ指揮下ニ在ル一切ノ軍隊
ニ対シ戦闘行為ヲ終止シ武器ヲ引渡
シ及降伏条項実施ノ為最高司令官ノ
要求スルコトアルベキ命令ヲ發スル
コトヲ命ズベキモノトス

日本国政府ハ降伏後直ニ俘虜及被
抑留者ヲ連合国船舶ニ速ニ乗船セシ
メ得ベキ安全ナル地域ニ移送スベキ
モノトス

最終的ノ日本国政府ノ形態ハ「ポ
ツダム」宣言ニ遵ヒ日本国国民ノ自
由ニ表明セル意思ニ依リ決定セラル
ベキモノトス

連合国軍隊ハ「ポツダム」宣言ニ掲
ゲラレタル諸目的ガ完遂セラルル迄
日本国内ニ留マルベシ

--- 降伏文書に天皇の署名 ---

「バーンズ原案」は「天皇の署名を必
要とする」としていたが、英國政府は
「好ましくない」と、この1点だけ修正
を求めた。昭和天皇は皇太子時代(昭
10年)に訪英された際、ジョージ5世か
ら君主として遵守すべきことをいろ
いろ聞いて帰国され、「英國型立憲君
主制」をとったから、英王室にも天皇
制への理解があったと思われる。

バーンズも修正に応じたが、9月2日
の降伏文書調印式に天皇が引っ張り
出されていたら、戦争継続派が「そん
な屈辱が認められるか」と、日本の拒
否になっていたろう。

モロトフ(V. M. Molotov)

1890~1986 スターリンの側近。昭和5
年人民委員会議議長(首領)。14年以来、外
相。スターリン死後、32年に解任された

▽東郷は 第1項について「主権の行使が占領軍によって制限されるのは当然であって、それは問題ないが…」と 第4項にこだわる
▽松本は「素人の間で問題にするのはsubject to だが、玄人の間で問題になったのは第4項だ」
そこで「そんなことは問題にしない方がいいでしょう。私どもが問題にすれば、必ず軍部が反対論に利用しますから」東郷を同意させた
▽迫水からも「総理は納得した」の電話

●陸軍には、外務省苦心の翻訳も通じない

▽軍務局は 第1項を「隸属する」と
衝撃的な訳にして「天皇の神聖を否定し、国体の根本的破壊を意味する」
第4項も「天皇統治の大権を認めておらず、国体の本義に反する人民政府を認めている」
▽豊田(軍令部議長)は 12日午前8時半
梅津(參謀長)と「宣言受諾拒否」を 上奏した
▽天皇は「まだ正式回答が届いていないのだから、到着後よく研究して判断すべきではないか」
東郷(外相)が 10時頃
「この回答で満足すべきである」と 上奏すると
「連合国回答はそのままでよいから、速やかに受諾せよ。また首相にも伝えよ」

●「バーンズ回答」は、再照会論を強くした

▽東郷が 首相官邸に行くと 平沼(枢密議長)が
「このまま認めれば、国体護持は不可能になる」
鈴木(内相)も 少なからず 動かされた様子で
「大阪城の外堀が埋められたに等しいなあ」
▽平沼は 木戸(内相)に「回答受諾の結果を非常に心配に思うから、充分考慮して処置して貰いたい」
木戸が「東郷外相から私に言って来たところでは、外務当局は、連合国側の回答で差し支えないとの解釈であるとの事です。私は、この責任当局の見解に信頼して、行動する積もりです」
▽木戸は 午後拝謁し こうした情勢を申し上げた
天皇は即座に、率直に言われた――
連合国側の回答の中に「自由に表明されたる国民の意思」とあるのを問題にしておるのだ

マッカーサー(Douglas MacArthur)

1880~1964 米国元帥。太平洋戦争開戦時の極東軍総司令官。日本降伏後、連合国軍最高司令官として日本占領に当たる、昭和26年朝鮮戦争処理問題で解任

… 米内(謙)は豊田上奏に激怒した …
参謀総長、軍令部総長は、帷幄(いわく)上奏と言って、軍の指揮・統帥に関する事項については閣議を経ずに直接天皇に上奏出来た。しかし「ポツダム宣言」受諾は政治問題であり、海軍には「政治に関与するのは大臣一人」の伝統がある。12日正午近く、保科(軍令部議長)に命じて豊田、大西(軍令部議長)を大臣室に呼び付けた。保科は「長い間米内に接して來たが、この時ほど米内が、威厳と憤怒とを以て人を迎えたのは見たことがない」と言っている。

まず大西に「軍令部の行動はなっておらない。意見があるなら、大臣に直接申し出て来たらよいではないか。最高会議に招かれもせぬのに不謹慎な態度で入って来るなんていうことは、実にみっともない。そんなことは止めろ」9日の会議の途中、阿南を連れ出した行為を叱責されて剛腹の大西が、涙を流していたという。

次に豊田に「大臣に何の相談もなくあんな重大な問題を、陸軍と一緒になって上奏するとは何事か」豊田が硬直したように答えられないでいると、「今度のことは、明らかに一応は、大臣と意見を交えた上でなければ、軍令部といえども勝手に行動すべからざることである。不都合千万だ」

豊田も大西も、その場は米内に頭を下げたが、最後まで、米内とは反対の態度を取り続ける。

米内は高木惣吉(内相)に「とにかく私は、弱いことになっているそうだよ。

と思うが、それは問題にする必要はない。もし国民の気持ちが皇室から離れてしまっているのならば、たとえ連合国側から認められても、皇室は安泰ということにはならない。反対に、国民が依然皇室を信頼してくれるのなら、それを国民が自由に表明することによって、皇室の安泰も一層決定的になる。これらの点を、ハッキリ国民の自由意思によって決めてもらうことは、良いことだと思う。

▽木戸は「煩悶は一時に消え、私はパッと眼が開いたような気持ちになりました。それはまことに直截簡明で徹底した御意見であり、しかも純真無辜な国民への信頼感が滲み出ている。陛下がこうまで徹底的にお考えになっている以上、終戦は必ず実現し得るとの自信を強めた」

そして「私が五年半の長きにわたって、陛下に奉仕している間に経験した、最も深い感銘を受けた瞬間の一つでした。陛下はもはや条件などかれこれ言わずに、とにかく終戦すべきである、との考えであったことが分かると思います」

(昭和24年5月17日GHQ歴史課の事情聴取)

▽12日午後 皇族会議が開かれ 天皇自ら固い決意
13人の皇族を代表し 梨本宮が「私ども一同、一致協力して陛下をお助け申し上げます」
▽臨時閣議の方は 再照会論が大勢に

午後4時頃 東郷から 松本(外務官)に電話
「形勢は非常に悪い。難しいよ」

▽岡本季正(スウェーデン公使)から 「重大局面」の至急電
松本は 鈴木(首相)に電報を見せ 決断を要請
「動乱等起こるとも断行」

木戸も閣議の模様を聞いて心配していた。天皇の言葉を伝えて決断を促そうと、12日夜9時半鈴木を呼び出した。「今これを引っ繰り返したら、それこそ何にもならなくなる。どうせ、これは負けたんだ。平和で進駐するのと、戦つて進駐するとでは大違いだ。思い切ってやりましょう。そのために殺されるのは、我々三、四人ですむんだ。グズグズしていたら、一千万人近い人が殺されるかも知れないんだ」

しかし、この大事のために、私の命がお役に立つならば、むしろ光栄として喜んで投げ出すよ」

梨本宮 守正(なしものみや・もりまさ)

明治7(1874)～昭和26(1951) 陸軍大将・元帥。軍事参議官、日仏協会・在郷軍人会総裁。戦後戦犯に指名されたが釈放

大きかった松本(外務官)の働き

夕方閣議から戻った東郷が「こうなったら、辞職するより外はない」と弱音。松本は「今辞職されたら全ては混乱してしまう。まだ正式回答は届いていないのだから、明日出直しましょう。今日はゆっくり休んで下さい」東郷を励まし、形勢逆転に時間を稼ぐことを考えた。正式回答が来れば、閣議を開かねばならないから電信課長を呼んで、「今夜中に正式回答を受信しても、今夜でなく、明日の日付でスタンプを捺して貰いたい。そして、絶対秘密にしてほしい」

正式回答が届いたのは午後6時40分だったが、電文には13日午前7時40分受信のスタンプが捺された。

岡本 季正(おかもと・すえまさ)

明治25(1892)～昭和42(1967) 京都生まれ。外務省に入り、昭和11年アメリカ局長。中国、英國大使館参事官を経て17年スウェーデン公使。27年オランダ大使

岡本(公使)は「至急受諾」を警告

スウェーデンで収集した情報では、①米英はなるべく速やかに対日戦を終結したい意向だが②ソ連は参戦したばかりだから占領の既成事実を拡大させようとしている③ソ連と中国は天皇制に反対している④イギリスでさえ「天皇制の承認は暫定的」と主

鈴木も「やりましょう」と答え、「たとえ、国内に動乱等起こる心配ありとも断行」で、二人の意見は一致した。

「ある科学者の戦中日記」(13日)

「今日は平穏かと思いのほか、6時ごろからすでにウーが始まった」と学生との会話を記録。「どうも、こりや、観測がちがったかな。いよいよ戦争続行と決まつたらしいぞ。これじゃ助からぬな。軍の連中と、地獄まで道づれを仰せつかることになるか…」「チャンスだったんですがね。これを逸したら、日本もドイツと同じになりますね」「全くそうだ。しかし、自分で腹を切らねばならない連中は、思いきれないのかも知れないで…」

●第一線司令官からは、「絶対に承服出来ない」

- ▽右翼団体は 12日から 愛宕山に立て籠もって「尊攘同志会」を結成 「バドリオ内閣を倒せ」「木戸、平沼、近衛、米内、東郷を誅せ」のビラ
- ▽木戸は 危ないので 宮中で 寝泊りするように
- ▽陸軍は 12日 前線部隊の動搖を抑えるため「対米交渉に関する件」を 大臣 総長名で打電「米国放送は國体護持の真意に反するから、断乎一蹴し、一意繼戦あるのみとの態度を堅持しており、各軍も作戦任務に邁進せられ度」

- ▽竹下中佐らは 天皇に 戦争継続に決意を翻してもらうため 天皇を 和平派要人から隔離する クーデター計画を 進めていた

クーデター計画要旨

- (一) 使用兵力 東部軍及び近衛師団
- (二) 使用方針 宮城と和平派要人とを隔離す。この他、木戸、鈴木、東郷、米内らの和平派要人を兵力を以て隔離す。次いで戒厳に移る
- (三) 目的 陸軍大臣の行なう警備上の応急危局出兵権を以て発動す
- (四) 条件 大臣、総長、東部軍司令官、近衛師団長の四者一致の上であること

張しているらしく。ロンドン・タイムズは「神格化された天皇制を葬れ」との社説を掲載している。

岡本は「アメリカはこのような強硬論をなだめて、やっと、あれだけの回答を作ることが出来たので、あれが連合国から期待し得る最大限のものだ。日本がそのまま受諾しない場合、アメリカの発言力は弱まり全てはぶち毀しになる」

… 米軍空襲は中小都市に向けて ……

「早く降伏しろ」と言わんばかりに、これまで被害のなかった中小都市に向けられた。(カコ内戦死難)

▽10日 岩手県花巻市(22) ▽11日 福岡県久留米市(214) ▽12日 鹿児島県阿久根市(14) ▽14日 埼玉県熊谷市(234) ▽15日 秋田市(70) 神奈川県小田原市(34) 群馬県高崎市(14) 同県伊勢崎市(24)

第一線司令官の電報

寺内寿一(南洋軍司令官) 「尊嚴なる國体の護持は、一時の屈辱により確保しえず。一億国民の最後の一人に至るまで戦い抜いてこそ、可能と信ずる」

岡村寧次(支那派遣軍司令官) 「数百万の陸軍兵力が決戦を交えずして降伏するが如き恥辱は、世界戦史にその類を見ず。派遣軍は満八年、連戦連勝未だ一分隊の玉碎に当たりても、完全に兵器を破壊し之を敵手に委ねざりしに、百万精銳健在のまま、敗残の重慶軍に無条件降伏するが如きは、如何なる場合にも承服し得ざるところなり。屈伏は亡國、繼戦は全国民一丸となりて、必死敢闘するところ、必ず死中に活を求め得ると確信しあり」

「四者一致」が大規模反乱を防いだ

クーデター派将校の先輩で、代表者格にもなった荒尾興功大佐（陸軍軍事顧問）は「彼らが暴発しないように、手元に引き止めておくため、この歯止めをかけた」吉田茂が和平策動者として4月に憲兵に逮捕された際、陸相になった阿南は、強硬に起訴を主張する法務局を斥け、吉田を釈放させた。荒尾は「大臣は日本の敗戦を予感していたからではないか」そう思い、「阿南は反乱を絶対に支持しない」と、この歯止めをかけたのだと言う。

▽東条（元顧問）は 軍務局に「阿南は自分の意見が通らなければ、辞めたらいいではないか」

阿南は 笑って 取り合わなかったが

天皇の翻意を願おうと 12日夜 三笠宮を訪ねた

▽林（顧問）の話だと「三笠宮はひどいことを言って、私を叱られた。陸軍は満州事変以来、一度も大御心中に副うような行動をしなかった。この期に及んで未だ抗戦を続行するのは以ての外だ」

阿南は遺書に「大罪を謝し奉る」

自決した際、2枚の半紙に遺書を残している。1枚には「一死以て大罪を謝し奉る」余白には「神州不滅ヲ確信シツト」と書き加え、「陸軍大臣阿南惟幾」もう1枚は「大君の深き恵に浴みし身は言ひ遺すへき片言もなし」の辞世で、陸軍大臣の肩書きはなく、陸軍大将としている。

この「大罪」には、満州事変以来の陸軍の責任をとることを明確にするため「陸軍大臣」と記したのではないだろうか。

●こうして、13日を迎えた

▽林（顧問）は 午前4時 梅津（參謀長）を訪ねた

「陸軍長老の努力によって、陛下のご意向をえて頂くようにしたいと、大臣は申されております。杉山元元帥は陛下のご信任がないから畠俊六元帥に広島から上京してもらって、お願ひしたいと大臣は考えておられるが、ご意見を伺いに参りました」

寺内 寿一（てらうち・ひさお）

明治12(1879)～昭和21(1946)山口県生まれ。陸軍大将・元帥。正毅（元帥）の長男。台湾軍司令官を経て昭和11年広田内閣陸相。北支那方面軍司令官。16年南方軍総司令官。敗戦後シンガポールで病死

岡村 寧次（おかむら・やすじ）

明治17(1884)～昭和41(1966)東京生まれ。陸軍大将。北支那方面軍、第6方面軍司令官を経て昭和19年支那派遣軍総司令官。戦後逮捕されたが、24年上海軍事法庭で無罪。32年日本郷友連盟会長

荒尾 興功（あらゐ・おかつ）

明治35(1902)～昭和49(1974)高知県生まれ。陸軍大佐。昭和9～11年ソ連駐在。参謀本部船舶課長など歴任。20年4月陸軍省軍事課長。戦後、復員庁総務部長

吉田 茂（よしだ・しげる）

明治11(1878)～昭和42(1967)東京生まれ。外務次官、駐伊、駐英大使歴任。昭和20年4月和平工作で憲兵隊に逮捕。戦後東久邇、幣原内閣外相。21年鳩山一郎の公職追放で自由党総裁となり首相。5次の内閣を組織、講和条約、日米安全保障条約を締結。29年造船疑獄で総辞職。保守本流元老として大きな影響力。国葬

三笠宮 崇仁親王（みさとのみや・たかひと）

大正4(1915)～ 大正天皇の第4皇子。陸軍少佐。戦後、東大文学部研究生として古代オリエント史専攻。昭和31年東京女子大講師。60年東京学芸大客員教授

杉山 元（すぎやま・はじめ）

明治13(1880)～昭和20(1945)福岡県生まれ。陸軍大将・元帥。昭和12年近衛内閣陸相。16年参謀総長。19年小磯内閣陸相。20年第1総軍司令官。敗戦翌月自決

- ▽梅津は「残念だが、私はポツダム宣言を受諾することには賛成だ」「四者一致の条件は崩れた
- ▽阿南は木戸に「陛下に思い直して頂けないか」
きっぱり拒否され「そう言うだろうということは分かっていたが、陸軍の空気はえらいのだよ」
- ▽午前9時から 最高戦争指導会議
迫水が開会劈頭「陛下の臨席を仰ぎたい」
梅津が「結論も出ないので畏れ多い」
4時間半の会議は再照会論(廻 講 訂)と
反対(鉢 載 納)が対立 決定に至らない
- ▽午後4時からの閣議で閣僚に意見を求める結果
受諾に賛成が総理一任も含め13人
反対が阿南 松阪(鉢) 安倍(鉢)の3人

—— 鈴木は、重ねての「聖断」を予告した ——

「国体の護持についても不安のあることは事実であるが、そうだからといって、戦争を継続することは、たとえ死中に活があるかも知れないが、それは余りにも危険なことである。陛下がご聖断をお下しになったのは、もっと高いところから、日本という国を保存し、日本国民を労わるという広大な思召しによるものと拝察する。私は、ご聖断のとおり戦争を終結せしむべきものと考えるが、今日の閣議の模様をありのままに申し上げて、明日重ねて聖断を仰ぐ所存であります」

- 14日朝、木戸が愕然としたのは1枚のビラ
- ▽B29が空から撒いたもので降伏の交渉条件がこれを軍隊が読んだらどんなことになるか
反乱は必至で終戦など吹き飛んでしまう
- ▽午前8時半 拝謁して御前会議開催をお願いした
問題はその御前会議をどうやって開くか
通常の手続きでは会議奏請書類に
両総長の署名・花押が得られないことは明らか
- ▽一刻の猶予も出来ないと鈴木と二人で拝謁
首相 内大臣の同時拝謁は初めてのこと
最高戦争指導会議と閣議の合同会議が
それも「天皇直々のお召」という
前例のない形で開かれることになった

畠 俊六(はた・しゅんろく)

明治12(1879)～昭和37(1962)福島県生まれ。陸軍大将・元帥。昭和14年阿部内閣陸相。米内内閣にも留任したが、米内が三国同盟に反対したため単独辞職で内閣を倒す。16年支那派遣軍総司令官。20年第2総軍司令官。A級戦犯で終身禁固刑の判決を受けたが、29年仮釈放

—— 「大本営発表」の騒ぎ ——

閣議の前、迫水が新聞記者に呼び出されて廊下に出ると、1枚の紙切れを手渡す。それは「大本営午後4時発表」の発表文で「皇軍は、新たに勅命を挙げし、米英支ソ四国に対し、作戦を開始せり」すでに新聞社に配布されラジオも午後4時放送の予定という。

迫水が驚いて阿南に聞くと、阿南も梅津も全く知らない話。梅津がすぐ、手配して寸前にストップ出来たが、これが放送されいたら連合国は日本の拒否と受け取ったに違いない。

—— 阿南は、暴発を防ごうと苦心 ——

迫水が閣議の途中、息抜きに隣室へ行くと、阿南が陸軍省に電話中で「何とかなりそうだ。我々の考えに近付いている」閣議の空気は前日の再照会論から一転、受諾が大勢になっていた。阿南は迫水に気が付くと「事を荒立てない方がいいからな」

迫水は、著書「機関銃下の首相官邸」に書いている。「私は時に多摩墓地に大将の墓参をするたびに、大将の生死を超えた勇気に感謝し、小さな墓石に抱きついてお礼を申し上げたい衝動にかられるのである」

—— クーデターは14日午前零時予定 ——

荒尾、竹下ら5人が13日夜8時ごろ阿南に計画を説明したところ、「計画が

▽阿南は 閣議が 御前会議に切り替えられると
「総理、もう2日待って下さい。陸軍の方はちゃんと始末しますから、どうか2日待って下さい」

鈴木は 言葉は穏やかだが 断固拒絶した
「阿南さん、せっかくですが、そればかりは承知できません。時機は今です。この機会を外してはなりません。悪しからず」

▽その場に居合わせた 小林堯太(元海軍医官)

町長(剛嶋)をしていたが 鈴木の首相就任で
町長を辞職し 鈴木の侍医役を務めていた
見るに見兼ねて 思わず「待てるものなら、
待ってあげたらどうですか」

▽鈴木は 厳しく 言った

「それはいかぬ。今日を外したら、ソ連が満州、朝鮮ばかりでなく、北海道にも来るだろう。そうなれば、日本の土台を毀してしまう。相手がアメリカでいるうちに、始末をつけねばならぬ」

▽小林が「阿南さんは死にますね」と言うと

鈴木も 首肯いたという

▽14日午前10時50分

歴史的な 御前会議が開かれ

二度目の 終戦の「聖断」が 下ることに

粗雑だ」と言つただけで、良しともダメだとも言わない。竹下は、決行は可能と判断、「14日午前10時からの閣議に乱入、和平派要人を拘束」に計画変更した。発動前に東部軍、近衛師団幹部を陸軍省に呼んで大臣から命令してもらうよう、準備を整えたが、阿南はすでに決心を固めていた。

陸軍の派閥抗争とは無縁で、忠実に役割を果たす阿南は昭和天皇お気に入りの軍人の1人で、なぜか「アナン、アナン」と言っておられた。13日朝、拝謁して天皇の地位存続に不安を訴えたところ、天皇は「アナンよ、もういい」と語気を強めて言われた。阿南は情の人で、天皇を慕っていたから、逆らえないと思ったのでは…。

阿南は14日朝、まず内閣に閣議を午後1時まで開かないよう要請し、午前7時、荒尾を連れて梅津(彌蔵)を訪ね单刀直入に切り出した。「あなたはクーデターを支持するか」梅津は言下に「それはダメだ。すでに陛下のご聖断があったのだ。ご聖断を無視してクーデターをやったのでは、第一、軍内が分裂するし、国民もついて来ない。この際はご聖断に従うばかりだ」竹下は「機密戦争日誌」に「茲ニ於テ計画崩レ、万事去ル」と書いている。

久の間の経験が何よりの教訓
である。次に、日本は過去の歴史
と思想の影響をうけ、精神世界
を重視し、人間の尊厳、人権の保
護に力を注ぎ、人間の精神的発達
を重視する文化である。

次に、過度の急進主義的行動
は、過度の保守主義的行動と同様
に、社会の発展を妨げ、社会の情勢
を悪化させる。一方で、人間の個性
を尊重し、個性を伸ばすことで、
社会が豊かになるべきである。

一方で、過度の保守主義的行動
は、社会の発展を妨げ、社会の情勢
を悪化させる。一方で、人間の個性
を尊重し、個性を伸ばすことで、
社会が豊かになるべきである。

久の間の経験が何よりの教訓
である。次に、日本は過去の歴史
と思想の影響をうけ、精神世界

を重視し、人間の尊厳、人権の保
護に力を注ぎ、人間の精神的発達
を重視する文化である。

（後略）

（後略）久の間の経験が何より
の教訓である。次に、日本は過去の歴史
と思想の影響をうけ、精神世界

を重視する文化である。

（後略）久の間の経験が何より

の教訓である。次に、日本は過去の歴史
と思想の影響をうけ、精神世界

を重視する文化である。

（後略）久の間の経験が何より

の教訓である。次に、日本は過去の歴史

と思想の影響をうけ、精神世界

を重視する文化である。

（後略）久の間の経験が何より

の教訓である。次に、日本は過去の歴史

と思想の影響をうけ、精神世界

を重視する文化である。

「終戦の聖断下る」関係年表

明治27 28	1894 1895	8. 1 清国に宣戦布告。日清戦争始まる 4. 17 下関で日清講和条約調印 4. 23 露・独・仏が三国干涉 5. 5 日本、遼東半島を清国に返還	昭和20	1945	体護持の1条件に絞るか4条件にするかで対立◆11時2分 長崎に原爆投下◆午後2時 臨時閣議。戦局判断で論戦◆6時 閣議再開。東郷「國体護持の1条件」を提案、阿南反対し閣僚意見分かれれる◆10時 鈴木、閣議を休憩にして拝謁、御前会議を奏請◆11時50分 天皇臨席のもとで最高会議を開く
明治37 38 明治6	1904 1905 1931	2. 10 ロシアに宣戦布告。日露戦争始まる 9. 5 日露講和条約調印。南樺太、日本領に 9. 18 柳条湖で満鉄爆破。満州事変始まる			8. 10 午前2時 須 東郷案・阿南案3対3で鈴木は「聖断」を仰ぐ。天皇は「外相の案に同意である」◆2時 最高会議は外相案を議決◆3時 閣議再開◆4時 最高会議議決を承認◆7時 宣言受諾通告を関係公使に打電◆9時 阿南陸相、「承認必謹」の方針訓示◆午後1時 重臣会議◆7時 同盟通信、日本の宣言受諾を短波放送(モービル)で海外に◆東宮大夫に穗積重遠朝刊各紙に下村宏情報局総裁談と阿南陸相の「全軍将兵に告ぐ」が並んで掲載◆朝 竹下正彦中佐ら5将校が集まり、「クーデター決行」を決める◆第一線軍司令官から「受諾反対」電報
明治12 14	1937 1939	7. 7 盧溝橋事件勃発。支那事変始まる 5. 1 满蒙国境ノモンハンで日ソ両軍衝突 9. 1 第2次世界大戦始まる			8. 11 8時45分「バーンズ回答」を傍受◆8時 梅津美治郎(外相)豊田(軍令部總長)「受諾拒否」を上奏◆10時 天皇、東郷に「速やかに受諾せよ」◆正午 米内海相は豊田、大西を呼び叱責◆午後3時 閣議で再照会論が大勢◆皇族会議、天皇は終戦の固い決意表明◆6時40分 正式回答届く。松本俊一(外務省)は、時間を稼ぐため「13時前7時40分頃」のスタンプを捺させる◆岡本季正公使(スウェーデン)から重大局面の至急電◆9時 木戸、鈴木を呼び出し「動乱等起こることありても受諾」に意見一致◆午後 阿南、三笠宮を訪ね天皇翻意をお願いし、叱責される◆陸軍は大臣、総長名で各部隊に「一意繼戦あるのみ」と打電◆右翼は愛宕山に立て籠もって「尊攘同志会」を結成、「和平推進派を殺せ」のビラを貼り気勢
明治15 16	1940 1941	9. 27 日独伊三国同盟、ベルリンで調印 4. 13 日ソ中立条約調印(有効期間21年4月) 6. 22 ドイツ軍、ソ連に侵攻。独ソ戦始まる 10. 18 東条英機内閣発足。東条は陸相兼任 12. 8 太平洋戦争始まる。真珠湾攻撃			8. 12 午前45分「バーンズ回答」を傍受◆8時 梅津美治郎(外相)豊田(軍令部總長)「受諾拒否」を上奏◆10時 天皇、東郷に「速やかに受諾せよ」◆正午 米内海相は豊田、大西を呼び叱責◆午後3時 閣議で再照会論が大勢◆皇族会議、天皇は終戦の固い決意表明◆6時40分 正式回答届く。松本俊一(外務省)は、時間を稼ぐため「13時前7時40分頃」のスタンプを捺させる◆岡本季正公使(スウェーデン)から重大局面の至急電◆9時 木戸、鈴木を呼び出し「動乱等起こることありても受諾」に意見一致◆午後 阿南、三笠宮を訪ね天皇翻意をお願いし、叱責される◆陸軍は大臣、総長名で各部隊に「一意繼戦あるのみ」と打電◆右翼は愛宕山に立て籠もって「尊攘同志会」を結成、「和平推進派を殺せ」のビラを貼り気勢
明治17 18	1942 1943	6. 5 ミッドウェー海戦。主力空母4隻喪失 8. 7 米軍、ガダルカナルに上陸開始 1. 14 米英首脳がカサブランカ会議。「日独伊三国に無条件降伏要求」を決定 9. 8 イタリア・パドリオ内閣無条件降伏			8. 13 午前4時 林三郎(陸續官)は阿南の命で梅津を訪ね「陸軍長老による天皇翻意」を打診したが拒否される◆9時 最高会議は3対3で決定出来ず◆午後4時 閣議は12対3で受諾賛成が大勢になったが、鈴木は重ねて「聖断」を予告◆午後8時 竹下阿南にクーデター計画説明
明治19	1944	7. 7 サイパン島守備隊玉砕 7. 18 東条内閣総辞職 7. 22 小磯国昭・米内光政連立内閣成立。米内は現役に復帰し海相 8. 5 最高戦争指導会議設置 10. 20 米軍、レイテ島に上陸 10. 25 神風特別攻撃隊、レイテ沖に出撃 11. 1 サイパン発進のB29、東京を初偵察 11. 7 スターリン、日本を「侵略国」と非難 11. 24 B29、中島飛行機など東京を初空襲			8. 14 午前7時 阿南、荒尾興功(軍令部)を連れ梅津を訪ね、「あなたたはクーデターを支持するか」。梅津拒否を竹下らに伝え断念させる◆B29、空から降伏条件のビラ撒布◆8時 木戸、一刻も猶予できないと御前会議奏請◆阿南、鈴木を訪ね御前会議延期を申し入れるが断られる◆10時50分 最高会議と閣僚合同会議が「天皇直々のお召」で開かれる◆正午 終戦の2度目の「聖断」下る
明治20	1945	1. 9 米軍、ルソン島リンガエン湾に上陸 1. 19 大本営、本土決戦の「決号作戦」決定 2. 4 米英ソ三国首脳、ヤルタで会談 2. 10 スターリン、ルーズベルトに「ドイツ降伏2、3か月後に對日参戦」を約束 3. 17 硫黄島の日本軍守備隊全滅 4. 1 米軍、沖縄本島嘉手納海岸上陸 4. 5 小磯内閣総辞職、鈴木貫太郎に大命◆ソ連、日ソ中立条約不延長を通告 4. 7 鈴木内閣成立。陸相に阿南惟幾、海相に米内◆戦艦大和、沖縄特攻で沈没 4. 9 外相に東郷茂徳 4. 15 憲兵隊、吉田茂を逮捕(5月30日獄) 4. 22 参謀本部、東郷に対ソ工作申し入れ 5. 7 ドイツ、連合軍に無条件降伏 5. 14 最高会議「和平にソ連仲介」方針決定 5. 29 軍令部首脳代わる。総長に豊田副武、次長には徹底抗戦派の大西淹治郎 6. 23 沖縄の日本軍、組織的抵抗終わる 7. 16 米が原爆実験成功 7. 17 米英ソ三国首脳、ポツダム会談開く 7. 26 ポツダム宣言発表(米英中首脳連名) 8. 6 広島に原爆◆東郷外相、佐藤尚武ソ連大使にモロトフ外相との会見を訓令 8. 8 モロトフ、佐藤に対日宣戦布告通告 8. 9 ソ連軍、満州などに一斉に侵攻 ◆午前10時 天皇、木戸幸一(内相)に「鈴木に速やかに戦争終結に努力するよう伝えよ」◆10時 最高戦争指導会議。国			8. 15 正午 終戦の玉音放送 9. 2 戰艦ミズーリ艦上で降伏文書調印式